千歳川放水路問題に思う

大畑　孝二

千歳川放水路問題に取り組んで、五年の歳月が流れた。昭和五十八年四月にウトナイ湖サンクチュアリに赴任し、しばらくして、苫小牧のある方から、美々川、ウトナイ湖に重大な影響を与える大きな計画が、秘密裏に進められていることを聞いた。しかし、開発局という本州にない行政組織がどのようなものなのか、又、美々川源流がどこにあるかも知らなかった当時の私には、ピンときずらい問題であった。そうこうして一年が経過し、私にとっては突然の開発局からの放水路計画案の発表となった。開発局は、放水路建設は、既定事項であり、今は、三本のルートのうちどれにするかを検討しているところで、この事業に理解してほしいというものであった。これを受け、マスコミの論調も、自然保護関係者も、農民も、西ルートは困る、東ルートは困る。三本のルート案以外にも、他のルートが考えられるのではないか、等々。ルートの選定の問題に踊らされた感があった。もちろん当初より、この問題は、ルートの選定が問題ではなく、何故放水路が必要なのか、治水対策として効果があるのか、流域変更をせず、石狩川水系の中で行なうべきだ等、根本的な問題提起もあった。しかし、こうした論調がマスコミにも出てくるのは、その後しばらくしてからだったと思う。日本野鳥の会としても、第一号のサンクチュアリを全国からの浄財一億円をもとに設置したウトナイ湖の自然が大きく変わるとの危機感から、放水路計画の根本的見直しを提起しつつ、美々川、ウトナイ湖への影響のないルートの選定、西ルート（美々川、ウトナイ湖を直撃するルート）の絶対反対を強く打ち出した。そして当時の上田環境庁長官のウトナイ湖視察、そして、西ルート反対の発言をさせるという経過となった。

以前、国は、住民運動にどう対処するかという、内部資料を作成し、その中で、「Separate & Control」ということが言われていると聞いたことがある。住民運動を内部分裂させながら、管理し、運動を慎圧させていくという意味なのだろう。開発局がこうした意図を持ちつつ、三本のルート案を発表したことを知りつつも、東ルートで、大きな打撃を受ける農家と、西ルートでは、ウトナイ湖の自然がなくなるという自然保護関係者は、対立的な位置にはまってしまった。対立と言っても、表だっての対立ではないが、「何故、鳥のために、我々が犠牲にならなくてはならないのか」といった気持を、多くの農民の方が持たれたようだ。私がはじめて、苫小牧市美沢植苗酪農組合長の五十嵐氏宅をおとずれた時もそうであった。自然保護関係の私を目の前にしての発言であったので、苦笑いしながらではあったが、「西ルートであれば、農地がはずれるのだが…」と言われた。しかし、今は、私たちとの交流の中から、根本的に、放水路そのものの反対の立場に立っておられる。

その後、日本科学者会議、㈳北海道自然保護協会の方々による放水路に変わる対案、問題点の整理がある程度進み、関係者の中では自然を大改造する決して行なってはならない事業としての認識が固まってきた。私たち日本野鳥の会も、美々川、ウトナイ湖の保全を中心テーマと置きながらも、放水路計画の根本的見直しを訴えている。

こうした状況の中で、私は今後「科学論争」と「世論への訴え」をテーマとしてやっていきたいと考えている。と言うのは、「水の時代をひらく」（木原啓吉編・LGC総合研究所）の中で保母氏が、宍道湖・中海淡水化事業を凍結させたものとしてこの二つを上げているのを見ても、その方向性が求められるだろうと思う。しかし、開発局は、調査結果の公表を非常にしぶっており、議論にならないことと、河川工学の専門家の多くは、開発局からの研究費があり、反論を述べることが、非常に難しいという、機構上の問題もある。そうした中、多大な予算を持ち、放水路建設のみを仕事の至上命令として、フルタイムでこの計画に没頭できる、開発局の優秀な専門家を相手にすることは、仲々厳しいことだと思う。現状は、科学論争の入口に少し入った程度という気がする。

世の中、理論では、いくら勝っても、権力、力に負けてしまうことは、多くある。放水路問題も、たとえ、科学論争で、勝ったとしても、力でおしつぶされることも考えられる。これには、世論しかないだろうと思う。今、苫小牧市は、関係住民の理解なしには、アセスメントがスタートしても、反対すると明言している。地元、苫小牧の世論が、この発言をさせたのであり、今後もねばり強い運動が必要だ。焦らずじっくり、対応していきたい。全道的、全国的な、世論形成に持っていけないものかと思う。

大畑孝二（おおはた　こうじ）
一九五九年岐阜県に生る。愛知大学法経学部法学科卒。（財）日本野鳥の会職員となり現在、ウトナイ湖サンクチュアリ・レンジャー。著書に「ぼくは野鳥のレンジャーだ」がある。